
恐ろしくも愛おしい僕らの美談

伊藤あおい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恐ろしくも愛おしい僕らの美談

【Nコード】

N9129F

【作者名】

伊藤あおい

【あらすじ】

少女『翔』と少年『日野』が図書館の奥の特等席で織りなす異端な青春。

第1話：君の風船

「なあ、翔」

なに、と翔と呼ばれた学生は、ずっと今まで読んでいた分厚い本から顔をあげた。

「どうして彼らは、あんなに頑張っているのだろうね」

唐突に質問を翔にぶつけた日野は、視線を薄らとした光が射す小窓の先に向ける。

そこには広々とした運動コートにひしめく、大蛇の如く連なりすべてを統一された少年少女の無数の足。それは何度もぐるぐるとコートを周回する。

全員のリズムを揃え、自我を押し殺し、青春の輝きという名の老廃物を垂らす。

日野はそんな様子が滑稽に思えた。そして同時に不快を感じた。

「惰性的だ」

日野がそうしているように翔も外を見つめた。

「それってどんな皮肉・・・」

「あんなの、つまらなくないのかな」

「そりゃあ、つまらないのしょうけど、好きだから続けられるものじゃない？」

日野は納得できそうになく、

「俺ならこれ以上自分を苦しめたくないけどな。あいつらが決心したことには違いないが、わざわざ休日にも強制的に集めさせられて自由を奪われているように見えなくもない。きっと今までもこれからこの世界に踏み入れたことでの後悔で自分の首を絞め付けるやつらがあの中に何人もいるんだろうな。強くなりたくても強くなれない。そして、辞めたくても辞められない。」

と言い放った。

「癖者・・・」

日野は背を屈め、苦笑し、動かなくなった。

先ほどから日野は生気を失ったかのように俯いたままだ。

「日野君・・・」

返事はない。

日野はまるで、何か目には見えない異物に背中を押しつぶされているようであった。

翔はそれを想像した。日野の上に乗っかっている大きな風船。そしてその中身は決して覗くことができない真っ黒で丈夫なゴム。その風船には重りが入っていてそれは最近、遞増しているようだ。その風船を私の針で刺してしまえば、一瞬にして日野を解読することができないだろうか。

だが翔はそれをしようとは思わなかった。

「今から日野君のことをあだ名で呼ぶことにします」

いきなりの翔の話題にぴくっと日野の体が反応し、ようやく顔を上げた。

「それは光栄だ。どんな名前を拝借できるのか楽しみだな」

と、これ以上翔を苛立たせるつもりはなかったので、日野は少しでも期待をしている素振りをした。

「ナーバス日野」

「ナーバス日野に襲名された率直な気持ちをお聞かせください」

「・・・」

「気に入らなかった？」

「センス悪い」

「センスなんて、そんなのどうだっていいじゃない。そもそも、性別、年齢、性格、人種や文化、個人が生まれ育った境遇などによって、その人の感性が異なってくるものよ。一概にセンスの良し悪しを決めつけて評価されてもらっては困るわ」

「はいはい」と日野は適当にあしらった。

「確かに俺、最近神経質かもしれない」

「ようやく気付いたのですか」

日野に何があったかのかは知らないが、干渉はしない。相手の口から発するまで、詮索はしない。

普段の生々しい喧騒から逃れるためにこの場所にいるので、あえて相手の傷に塩を擦りつけるような行為はタブーである。

「モシエのシュークリーム」

は？と日野は怪訝そうな顔をする。

「モシエのシュークリームが食べたいの」

翔は本で顔を隠し、ぶっきらぼうに告げた。

モシエとは、明らかに、日野の面前にいる女子が好みそうな、

この学園が建っている街にあるこじゃれた洋菓子店である。

「わかったよ・・・」

とため息交じりに日野は承諾する。

ふふつと口元を緩めた翔はボタンと重厚な本を閉じ、近くにあった本棚に戻しに行った。

ここからモシエは徒歩10分。

只今5時半。6時には閉店するはずなので、急がなければならない。翔が日野にデザートを要求する際、望みが叶わなかったときの翔はとてつもなく不機嫌になる。今日もその可能性が無きにしも非ずと

いった時間帯なので日野は焦った。

頼むから、売り切れていないでくれと、日野は自分のリュックを背負い、ついでに翔の革のバックを机から掴み上げ、急ぎ足で翔のもとへ向かった。

第2話：侵入者

「ごめんって・・・」

謝罪した日野だったが、相手の返答はない。

今日でこんなやり取りは何回目になるだろうか。

先ほどから日野の問いかけには全く反応せず、年季の入った本から翔は視線を放さない。

まるで幼児がお人形に対して、会話が成立しないとわかっているのにも関わらず、話しかけているようだ。

「翔ちゃん？」

今度はおどけてみる。

日野は知っていた。翔の本のページをめくる手が、日野が謝り始めてから一切動いていないということ。随分と心残りがあるのだろう。

「シュークリーム食べたかった・・・」

首をかしげ、下を向き、ようやくか細い声を鳴らした。昨日は閉店前にケーキ屋 モシエ に着いたのだが、肝心のシュークリームは売り切れていたのだった。

「わかってる。今日は早めに行こうな」

だいぶ落ち込んでいる翔をこれ以上不機嫌にしてはならないと宥める。

やっと目を合わせてくれるようになった翔がほっとしたのもつかの間、翔は上目遣いをしながら

「えー、でもまだこの本ぜんぜん読んでないのよね」

と、けろつとしてみせた。さらに「まだここにいたいな」とでも言っているように透き通った目で懇願する。

モシエ の前で別れた時から、ずっと胸に絡み付いた困惑をあっさり踏みにじられた日野はおもいきり顔を引きつらせた。

「この小娘が！」

「ナーバスうるさいわよ、ここをどこだと思っているの？」

それほど日野の声は大きくなかったが、翔は発言の内容に少々腹を立てたようであり、自身のサンクチュアリでの日野の行為を蔑み、制した。

この場所は下階と違って、自然体で話しても咎められないくらい、誰も人が寄ってこない。

「もう知らないからな」と言って、日野はそっぽを向いた。

「シュークリームはー？」

「・・・・・・」

些細な争いも明日になればまた同じ時間、同じ場所で出会い、心をぶつけ合う。

翔と日野がこうして放課後に互いの存在を認め合うようになったのは遡ることおよそ3カ月前。

2人がそれぞれ、誰ひとりとして自分の境界線への介入を許していなかったとき。

解放の合図が鳴り響く校舎を飛び出し、急ぎ足で向かう翔。

窮屈そうにしている革張りの鞆を時折足にぶつけながら、図書館にのびる石畳の上をひたすら歩き続ける。

もうじき初夏を迎える。小道に沿って力強く青々と生い茂っている木々が館へのカウントダウンをし、とっておきの場所へ導く。

翔の視界に入ってきたそれは、古風な趣が溢れんばかりの巨大な建造物。

明らかに年季の入ったそれは、今までにどれだけの人間の感覚を引きつけてきたのだろうか。

古く重厚な扉を前にし、一息ついて翔は大きな手すりを力強く引く。

扉から徐々に現れる世界は翔のすべてを虜にし奪い取り、無限な可能性を露わにして、翔を絶望にさえさせる力を持っている。

体育館ほどある建物を所狭しと埋め尽くす膨大な書籍。

点在する小窓から放たれる繊細な光は、厳格な空間を存分に引き立たせ、リアルワールドからお伽話ヘトリップしたような雰囲気さえ感じられる。

・・・すごい

ここに通うことを日常の習慣にしている翔でさえ、思わず感嘆してしまった。

決して不快感を与えることのない紙特融の自然な香り、それは翔の祖父母の香りを彷彿させ、翔を優しく包み込む。

本の滝が絶景を映し出し、時が止まったかと錯覚しそうなほどの閑静さ。そして当時の建築士が生み出したセンスが散りばめられる光と影のコントラスト。翔は自らの五感を活動させ、身体に沁み込ませるように記憶させる。

出入り口から少し歩き、左側に設けてある貸出カウンターに向かう。

「こんにちは」

「こんにちは、今日も早いわね」

と、司書のお姉さんといつもの日課となる挨拶をかわし、安息の場所へと歩を進める。

翔の特等席はカウンターの近くに構える小さな階段を上り、奥へ奥へと進んだ先にある。

そこには木製の小さな机と背もたれが長めにデザインされている椅子が小窓ごとにひと組ずつ壁に寄り添っており、

巨大な館内に不思議と閉塞的な空間を創り上げている。

毎日のように楽しい時間を過ごす席は、後ろから3番目。

その位置の用はバランスの問題であり、翔が席に着いた時の、いかに図書館と自分を一体化できるかとい点で、翔なりに熟考した結果

だ。

背の高い本棚をいくつも潜り抜けたその先。

だが今日は翔の特等席の前に見知らぬ男子がいた。

まだ放課後が始まったばかりのいつもは閑散としている時間帯であり、

下階のフロアには司書以外の気配すらしなかったはず。

二階には比較的需要が低い書籍ばかり揃えられており、現代の学生の興味はあまり期待できそうにない。

なぜなら、悲哀と希望で満ちた時代を駆け巡ってきた貴重な本を後世へ残していこうという保護活動の一環をこの図書館は担っているからである。それらは埃を纏うことなく、視覚的に普遍的な存在感を人々に与え続ける。

しかし、そんな時間帯、そんな場所になぜ。

ただの偶然にしては、胸騒ぎがした。

もちろん想定外の不自然な状況にもややもやした気持ちではあったが、翔はそれ以上に、特等席だからといって、数ある席の中でも男子学生の後ろの席に座るという行為、即ち、相手に与える翔側が引き起こす不自然さも自重しておきたかった。

翔が想像する、男子学生に与える圧迫感と第三者から見ても少し気になるような光景をつくるのは避けておきたい。

何より、男子学生のために翔のディテールにこだわった自分のルールを変更することが苛立たい。

羞恥や怒り、焦りと倦怠感が一気に雪崩れこむ。

あれこれと模索した挙句、翔は特等席に座ることを一度あきらめ、気を取り直して本を探すことにした。

第3話：感情には抗えない

相変わらず、見ず知らずの男子学生は顎を乗つけた片腕を机につき、呆けた顔で外を見つめている。

翔は気を取り直し、「気になっていたあの本を探そう」と意気込んだが、天井まで続く書籍を目で流し見るのに精一杯だった。副次的なことだったから仕方ない。

時折、男子学生とシルバーの小柄な腕時計を交互に凝視する。即刻立ち去ってほしいという願いしか念頭に置いていなかった。

翔は、この場所が学園内での公共物であるということは言われるまでもなく理解していたが、以前からのあまりの人気の無い閑散さで、勝手ながら「ワールド イズ マイン」を唱えていた。

あれから1時間が過ぎ、他者との接触に足踏みしていた翔も、そろそろ肝心な要諦を見逃さずにはいられなくなった。

早く取り戻したい。

翔は深呼吸をし、腹構えを決めた。

慎重かつ自然体な行動をとりながら相手の方に近づいていく。

開放的な2階に連なる、壁に設置されている書架以外のそれらは1台約5メートルの横の長さがある。本棚は翔の現在地点から男子学生まで5台連なっており、通路も含めると距離は約30メートル。

翔が見渡した様子では、現在2階には翔と男子学生しかない。司書は1階にしか常置しておらず、人の気配は空しい。2階から下へは見下ろせるが、まだ放課後の合図も告げられたばかりだ。早々にここへ足を踏み入れ、熱心に本に興味を寄せるものはいなかった。

男子生徒の方向へ一直線に進むことはさすがに厳しい。前後にも備

え付けられてある書架を含め、それらに沿いながらランダムに蛇行して行かなければならない。

現在、標的からおよそ20メートル付近。

興味のある素振りをして、適当な書籍を手にとってみる。

彼を確認。反応はない。

思い切ってさらに10メートル進む。

平常心を装うとするにつれて、無意識に緊張が^{はいち}迸る。

翔は悟っていた。これは無意味な緊張だと。自分自身しか感じていない、何事にも影響も及ぼすことはない無駄な感情。感じるだけ損だと。

それはまるで、ふと過去の羞恥を思い出し、後に、「今更後悔しても、誰も覚えていないのに」と開き直ろうとしながらも己の甲殻内で葛藤し、なかなか自己完結できずといった症状。翔はそんな状況を生み出す自分にいつも嫌悪する。

身体から込み上げるものを払拭しようと試みるが、それでも一度意識するとさらに身体が反応する。その現象に、気づいた時にはもう遅い。足が震え、儚く醜い害虫らが踵から湧き上がるかのように悪寒が翔を襲う。

思わず目を見開き、息をのむ。

不覚。「また自分で追い込んでしまった」と悔やみきれない。

自らを鼓舞し、正常を取り戻して慌てて書架に手を伸ばし体を支える。

「これじゃ、駄目だ」

自然に行動しようと必死になる翔。

今のほんの数秒のアクションで、あの男子学生は異変に気付いたかもしれないと存在を確認する。

そして、今まで物思いに耽っていた標的がいつの間にか消えていた。

「大丈夫か？」

不意に頭上から降ってくる低い声に、翔の反応は遅れた。ゆっくり振り向くその先にはやはり。

翔は不意をつかれ、力の抜けた膝がぐくと下がる。下半身が重力に逆らえない。

ずっと座り込む形になろうとするのと同時、バランスを崩した上半身が背後の書架に当たる。

一瞬何が起こったのかも判断できず、怖くなり目を閉じた。

幸い、それほど衝撃は無かった。右肩が書架にぶつかり、そしてその衝撃で頭上から降ってきた数冊の本が顔や腕をかすった程度。足元を見ると、本が床に乱雑している状態だ。

翔は顔を上げると驚くことに、左腕は男子学生に引っ張られる形で掴まれているのを確認した。

翔と男子学生の繋がれている腕。信じられないとも思ったかのようになんか凝視する。

他人に触れられた。

呆然としている翔に対し、男子学生の顔は引きつったままだ。

時計のシルバーのチェーンが掴まれている手により腕に食い込み、痛むのに気づいた。

痛みや恐怖、憎悪を感じ、咄嗟に腕を引っ込ませる翔。

「……………あ、やっ」

卒然とした想定外の事態はコミュニケーションの障害を引き起こす。
「・・・いやっ・・・」

細い腕を精一杯振り上げながら、全力で拒み続ける。

「落ち着け」

我を忘れている翔に目の前にいる相手は気を使っつか、穏やかに宥める。

それでも翔のリミッターは解除されたままだ。

取り戻さなくちゃ。

取り戻さなくちゃ。

腰が抜けたまま、まだ到底力の入らないであろう足で床を蹴ろうと試みる翔。

しかし、生まれたての小鹿。

それでもなお両手で這いつくばり、あの場所を目指す。

脳の伝達を身体が全く受け付けていない。

さらに欲望は膨らみ、身体は全く進まず。

翔の白い肌に、透き通る一筋の液体。

込み上げる吐き気、止まない嗚咽。

男子学生は場違いにも、翔に見入ってしまった。

その哀れな姿が美しいと思った。

それはとてもとても人間的で、尊いもののように思えた。

気がつくと、床に這いつくばり抵抗する翔の肩を押さえ、半ば覆いかぶさるようになり、翔が回復するまで待ち続けた。

第4話：君に伝えたい

燦々^{さんさん}と照りつける太陽の光線の下、己の限界に苦闘していると少年少女たちをよそに、日野と翔は相変わらず彼らの城壁に立てこもっている。

「今だから言うけど、あの時の翔はひどく醜かったな。」

「何のことかしら？」

翔はその話ではできるだけ避けたいと、しらばくれたが、日野はそんな翔を尻目に、強引に続ける。

「俺はね、驚いたんだ。別に、翔に引いたって意味じゃないからな。真に受けるなよ？」

翔は露骨に眉間に皺を寄せて、苛立っている雰囲気を出す。

「だから何が言いたいのよ」

「俺は感動した。この歳になって人が理性のままに自分のものを守ろうと必死になっている姿に。床に這いつくばっても死守しようとする姿にさ。しかも、まるで他人に自分の裸体以上のものを見せるような恥ずかしい行動だ。だって、いくら仲良くなって関係をもつようになったところで、相手にあの時のように取り乱した姿見せるなんてことがあるか？」

「日野君変態さんだったの？早く言つてよ。110と119のどちらが良い？」

「まあ、なんとも罵ってくれてかまわない。一応、悪辣なことを言つてるとは十分承知してるからな。それなりの仕打ちは仕方がないと思つてる。それでも聞いてほしいんだ」

「期待のSMオールラウンダー新人」

2人は全くかみ合わない会話を展開する。

「話が逸れるが、こんな歳になるといつもこいつも格好ばかり気にしてて、痛々しいんだよ。みんな、いかに人に好かれるかを考え

てるばかり。友人をつくるにしても、恋人をつくるにしても、とりあえず周りの体裁を優先する」

「シャツの袖口汚いわよ」

「彼らは他人の前で、声にならないような声で懇願し、嗚咽を繰り返して、後先も形振りも構わず何かを守ろうとすることがだらうか。それも自分の利益のためだけにだ。他人も含む事態だったら、傍観者も『相手のためにここまでできるなんて』と、納得せざるを得ないだらう。しかし、そのような保険もない状況だったら？」

「日野君。私ももうちょっと保険のこと考えようかな？ さっきから身体のおちこちが痛い。とっても痛い。もしかして痛風だったらどうしよう」

「そして、何を話しているかと思ったら、男女関係なく、二言目に『きもい』だの『うざい』だの、もう飽き飽きだ。奴らは汚い」翔の表情が真面目になり、そして一層暗くなった。

「私もその考えには頷けるけど、日野君はさっき私に『醜かった』って言ったわよね。彼らが『汚い』ならわたしも日野君にとっては同じ存在なのね。私にとって日野君の存在はウシガエル以上、ガマガエル以下といったところかしら」

翔はますます自棄^{やけ}になってくる。

しかし、翔の態度や言葉の猛攻をも日野は甘んじて受けるようだ。饒舌になってきた日野は翔にはお構いなしに心中を打ち明ける。

「違う、翔のあれは全く違った。そしてわかったよ。醜いと美しいは表裏一体だったんだなって。例えば俺、今でもミロのヴィーナスの美しさって理解できないけど、ミロのヴィーナスの価値ってこういうことを言っているのになって。腕の無い不完全さが素晴らしいとか騒いでるだろ？ あのとときの翔も、人間としての不完全さ、不安定さが爆発したんだ。『芸術は爆発だ』って、こういうことを言うんじゃないか？」

自身の理論を説いた日野は翔の反応に期待した。

「もうすぐ夏休みだったと思うけど、今日の図書館寒いね」

相も変わらず、翔は日野の哲学を受け入れるといった姿勢は取ろうとしない。

「俺も悪かったと思ってる。この場所に座ってたら、翔はどんなアクシオンを起こすかなって。それだけだった。まさかあんなことになるなんてね」

「私がよくこの場所に居るってことを知ってたのね……。若干この歳にして、変質者の仲間入り？こうしているうちにも盗撮とか、盗聴とか……。怖い……」

まさか、と机の下を覗き、窓の棧に目を配り、丁寧に辺りを見回す翔。

これは初夏を感じさせる液体なのか、それとも翔の攻めが効いてきた液体なのか、珍しく日野の額に込み上げてくるものがある。そろそろ翔の怒りも臨界点を突破しそうだ。

そんな翔を見かねて「そして、これだ！」と大きな白い箱を取り出した日野。

その中身は自分の罪を少しでも軽くしようと日野なりに考えた形であつた。

「何、これ？こんなものに惑わされないわ。こんなもので許しを請おうとするなんて日野君は汚い」

「言っただろ。汚い、即ち醜いと美しいは表裏一体だって」

「どういう意味？」

翔はかなりご立腹だ。

日野は白い箱の名から丁度良く冷えているだろう色とりどりのゼリーを取り出した。

「僭越ながら、私が作らせていただきました」

と、真面目な顔で、両手で翔にスプーンを渡す。

ごくりと喉を鳴らせ、目の前に自分のためだけに作られたゼリーと先ほどのひどい扱いの狭間でしばらく葛藤する翔。

やはり理性は止められない。スプーンを受け取ってしまう。
おそらく巨峰味であろうゼリーを手にし、目線まで持ち上げた。
透明な容器に入っているそれは、目の前にいる日野を映し、小窓か
らこぼれる光はきらきらと艶やかな紫色をさらに引き立たせる。

「美しいわ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9129f/>

恐ろしくも愛おしい僕らの美談

2011年1月15日02時47分発行